

# 弥生キャンパス人生模様

下村潤二郎

(元・東京大学第二工学部・生産技術研究所事務官)

## 1. 弥生キャンパス

弥生町のキャンパスは広がった。本郷キャンパスの88%に当る。間口1,000メートル、奥行500メートルと瀬藤先生はこう仰有って、そこに10学科、3 共通教室を設計した。学科ごとに建物を離れた。火事をおそれ輻射熱で燃えない距離をとったという。当時、火事を出したらおしまいだ。だが昭和19年1月、応用化学は失火で半焼した。その日、教室主任の事務引継があって罰は増野先生が負った。昭和17年4月のドウリットルの東京空襲は抜けがけの冒険だったが、昭和19年6月、マリアナ沖海戦で敗れてからは巨大爆撃機 B29が無着陸で飛べるようになり、空撃ははげしくなった。降伏を要求し、様々な情報を伝えるマリアナ通信という便箋大の伝単が頻りと撒かれるようになったのもマリアナ海戦以後である。第二工学部は広いからドスンと東になって落ちて来たり、入れものまで落とされた。

昭和19・11・9(と思う)、第二工学部は第1回の空襲警報を受け同時通報で知らせた。警報は千葉局から電話で入る。その日天気はよく校庭に多数の学生が出ていたが、蜘蛛の子が散るように退避した。太平洋の沖に一定距離に傭船された漁船が出て見張ったが、それもしばしの効果で終った。制空権が敵方に移ると艦載機が飛来して、機銃掃射した。その弾は校舎にも学生寮をも見舞った。そして昭和20年、日本全都市への空爆となった。凡そ日本の60都市は焼けた。戦意を挫く狙いを考えた計画的空爆と思われ、大東京が3月10日の陸軍記念日に、横浜が5月27日の海軍記念日に的をつけて爆撃され大死傷者を出した。七夕の日には千葉を夜襲。この空襲で第二工学部も目標となり、航空機体、航空原動機の2学科は全焼、冶金、船舶が半焼、道兵、暖房機関室も一部焼けた。岩倉武嗣書記官が焼跡に立って茫然とし、物も言わず暗い顔をしていた様子は今も眼に残る。岩倉さんはそれからまもなく第二工学部を去った。岩倉さんの去る日、教官食堂でささやかな送別会を開いた。その時挨拶に立った瀬藤先生の震えているようなこぶしと目をうるまして言葉も詰まっていた姿を初めて見た。それは十二月八日の日のあの開戦を想い起こしていたためである。先生は宣戦布告に怒っていたのだ。

弥生町キャンパスの広さは、電車を下りて南門から職場まで5分ないし10分以上歩かなければならない。瀬藤先生

はいつも道を踏み固めようとして歩くんだよと仰有った。森脇義雄先生は電車を出て何歩で南門に着くかを検べてあって電車の時刻に合わせているから、途中で話しかけても止まることはしない。その空地は鉱山学科の来る日を待っていたところだ。

第二工学部にはスパイがいるといわれたり、資材が盗まれたり、牛がいなくなったこともあった。牛は学生食堂の高橋司厨主任が飼育していた牛でいずれは学生の口に入る筈だった。占いにも出したが遂に出なかった。教職員の悩みは黄塵万丈になる風の日だった。だが、それ以上に末弘巖太郎先生を怒らせてしまった一件は最も悲しい。先生が大事な講師でいらしたことを知らずに南門の巡視が呼びとめてしまった。先生は踵を返して帰ってしまった。巡視の報告を聞いてともかく学部長にあやまった。井口先生が本郷に出向いて末弘先生に無礼を謝したが遂に戻らなかった。巡視は土地を提供してくれた人達で憎めない良い人物ばかりだったが、いまま井口先生には申し訳ないと思っている。

15万坪の広地に13,000坪の建屋をという目標には遂に達しなかったが、それは是非もない。何となれば第二工学部の建設と大東亜戦争の勃発とは楯の表裏のようにぴったり合わさって軍が出すといった資材も出せなくなったからだ。にもかかわらず教職員はもちろん学生全体が我慢したのは、辺境に甘んじて協力したフロンティア・スピリットがあったからだと思う。第二工学部卒業生が、ドリルのように産業界に飛び込んでその頂点に達した力量はここで養ったフロンティア・スピリットが大きな資産になったからだと思う。

この頃のしめくりに一つのトピックを書く。建設時代、岩倉書記官と河内司計掛長とが連れ出って南門を入った。「時に河内君!!」と岩倉さんが呼び掛けたが、河内君がいなかった。驚いて岩倉さんは戻った。河内君は深い穴に落ちていた。河内さんは暗いせいもあったが、相当の近視でもあったからだった。

構内の松、モッコク、けやきなどが大きくなったころ生研をあとにした。

## 2. 幻の本土決戦

戦時下の第二工学部は独立した学徒大隊を編成した。大

隊長は学部長が当たり、軍事教官は大隊長補佐となった。軍事教官は老練な陸軍大佐で遠山憲という軍人が任じられてその下に二人の尉官が従属していた。総務班長は小宮一夫学生主事だったが、昭和20年3月応召し、以後私が総務班長を代行した。晩春の頃だったと思うが、急に遠山大佐は、1、2年を主体とする学生を引具して、富士山麓に兵舎（板妻廠舎だったか）を確保して短期演習を行うと言い出し私も随行した。その演習の帰り、竹槍がわりに雑木の木刀を持たせたいかと相談を受けた。私はその調達に当たったが同時に本土決戦を想定していることを知った。当時、房総の九十九里浜一帯は、米軍の上陸を想定して邀撃の陣を敷いており、応召した小宮学生主事もそこにいた。千葉県には佐倉、習志野、館山等に主要の軍事施設のあることは知っていたが中味は空っぽ同然であり、第二工学部は県下唯一の大学として強力な存在でもあった。第二工学部の講堂裏には兵器庫があって、そこには若干の三八式歩兵擬銃と銃弾があったが物の数ではない。本土決戦は近しいわづとも遠からずという感じがして一段と緊迫感を覚えた。

これについて余談にわたるが、去る2月、司馬遼太郎さんが亡くなった。彼は一学徒士官として満蒙の戦車隊員を経験し、ソ連のガッチリした戦車に対して、日本の戦車は脆弱でとても太刀打できない代物だと、その随筆で科学的分析していた。実は司馬さんの死を追慕して、井上ひさしさんが書いた文章に次のような文がある。

「その時期、九十九里浜から帝都へ攻め込むはずのアメリカ軍を叩くために、栃木県の佐野に陸軍戦車連隊が移動して来た。(中略)戦車は先鋒を引き受けるのだから当然火力が集中される。司馬は自分が挽肉になるという不快な運命を覚悟した。」挽肉というのは、日本の戦車は薄い鉄板だから、弾丸は鉄板を打ち抜いて中でグルグル飛びまわるであろう。というのだ。

終戦があと数ヶ月遅かったら本土決戦となり、司馬の搭乘する九七式中戦車隊と、遠山大佐の指揮する棍棒隊は房総の野で運命を共にしたかも知れないと想像できる。それは運命の神の遊びだったとってしまうには、余りにも割り切れない潜在事件だったと生涯忘れられない。

右に引き続いて私の体験を記さなければならない。昭和20年7月、東都軍管区司令部から東京都下大学の学生監は訓練のため出勤すべし、と非常呼集がかかった。東大からは東大本部の高松君と私が出た。二人は学生課の学生主事補である。二人は十日間、柔道、剣道、教練、見学を引き廻された。私は昔て重砲兵として入隊し要塞で鍛えた経験があるが、それでもぶつかりげいこでは血が流れた。神社参拝で誰かが「神社も終わりじゃないか」と不遜の言葉を吐いた。大佐指揮官は頗る苦い顔で睨んだ。群馬県太田市の中島飛行製作所のことはよく覚えている。それは特攻機

というのだろう。八畳間に納まるぐらいのプロペラー機を組み立てていた。指導するのは男子学生でリベットを打ち込むのは女子学生である。彼等は黙々としてやる。誰も殆ど質問しなかった。つまり終末の感じがしたからだ。出来た特攻機はたんぼの先の土手のわきに隠すように並べてあった。神風特攻隊の原型と思った。軍は勇気を奮い起こすべく見せたのだが、冷静に見れば悲観論を言いたい気持ちだった。そして前後の日は、習志野の教導隊に入って匍匐訓練と銃撃戦をやった。その日、若い将校が訓示した。「わたしの恐れるのは国民が音<sup>おと</sup>を上げることである。われわれ軍人は決して負けない。頼みは諸君の支えである。」この言葉は分かる。しかし、現実<sup>じつじ</sup>は挽歌となった。それは天皇と御前会議の出した結論だった。

思い起こすことが一つある。八月某日、私は一晩考え抜いて情報局総裁下村宏宛に建白書を書いた。便箋一枚程の文案で内容は、「時局の結末を決めるのは今や国民しかない。大本営は国民の声を聞いて態度を決すべきではないか」という要旨であった。

### 3. 終戦と接収

昭和20年8月15日は終戦の日である。終戦という言葉は後につけた言葉で正直に言えば降伏の日とか敗戦の日というべきだろう。朝から重大放送があるから中央講堂に集まるようにと何度も同時通報を流した。正午、最敬礼して天皇独特の荘重な音調に耳を傾けた。聞き終わって一番先に「戦争は終わりましたね」と言ったのは兼重先生だった。決戦か停戦かそのいずれかだろうと内に案じていたのは私だけではなかった。晴天残暑の陽気が体にのしかかっていたが、涙を流した者はいなかったようだ。学部長室に井口、瀬藤、竹中の三評議員と教室主任らが加わって評議が始まった。私は学寮の委員長宮坂善四郎君からとりあえず情報を聞いた。学生は重労働させられるという声が圧倒的に多かった。井口学部長は授業は続けよう。わたしはいつでも行動できるよう巻脚絆は取らない。学生で郷里へ帰りた<sup>い</sup>者は止むを得ないということだった。遠山軍事教官にこういう場合どうするかと学部長が訊いた。軍隊はまっ先に重要書類を焼却しますと答えた。私は内心意味がないなと思った。この日、遠山軍事教官は揭示用紙に教練はやるという文句を達筆で書いて私のところに持って来た。その効果だが、教練は、3日続けてやった。集まった学生は約30人だった。

九月に入った。突然ジープが正門から入って来た。カニガムと名乗る准将と副官ら数名である。突差に接収だと思った。学部長室に案内した。ここでちょっと破天荒なことが起こるのである。井口学部長は先に口を切って英語であいさつをした。その英語を予想していなかったらしい准将はオーム返しに英語が話せる人に会って大変うれしい

とほめた。途端井口先生は忽ち表情がゆるみ右手を白髪をつかむように振り上げながら「イヤー、それほどでもないんだがねー」と江戸っ子口調の日本語が出てしまい、はにかむように笑った。通訳の言葉を打ち消すように、敵も笑い、味方も笑うというハプニングになってしまった。これがきっかけで接収の話はいい方にほぐれた。勿論、笑いがすべてではない。教育の場の大事さを認めたのである。会談は20分ほどで校内を見ることもせず彼等は去った。

井口先生の人柄は表も裏もない天衣無縫を長所とする。学生が好きで五つもある学生寮に招かれれば必ず出かけた。スポーツも大好き、小石川駕籠町の自宅が戦災で焼けて弥生町の官舎に暫く仮住まいされていた或日、官舎の子供らにまじってかくれんぼをしていることもあった。私が決裁の書類を持って上がった時、こんな内明け話を聞かされた。“自分に判断出来ない書類が来たら、これこれのデータを持って来なさいといえればいいんだ”と、瀬藤さんにおそわったと仰有る。この話と対照的なのは岩倉さんの愚痴めいた話を思い出す。その愚痴とは「瀬藤先生は起案を見ると読む前に赤ペンを手に取って直す気になっているんだもの……」と。

接収事件については後日譚がある。一年も経った或日、井口先生はなにかの会合に出ての帰りに紙に包んだおみやげを持って来られた。そしてこんな地図にくるんでくれたんだよといってその地図を下さった。それは双六大の厚い洋紙で、なんと第二工学部キャンパス全図というべきものだ。航空写真を台にして色刷りに描いてある。敵は目ぼしい施設と見て手をかけて作ったものと思うと、空爆のための地図というより、上陸後の接収施設として考えていたのかと思わざるを得ない。この地図は家内も覚えていると言っているのだが、残念だが見つからない。



さて、物分かりの早かった准将の次に乗りつけたジープは武器等の接収だった。少佐級の軍人は予め調べてあったらしく造兵学科を案内せよという。教室主任の菱川万三郎先生に連絡をとると、“君に任せる”という。ジープに乗って造兵教室に着く。そこに小型だが戦車がある。先ずそれを書きとめる。次に造機類を案内せよという。その部屋を開けようとしたが開かない。キーを取りに行くといったら、その必要はない。この上に乗って中へ入れとって少佐は両の手のひらを組んで、これを台にして欄間から入れという。私は土足で彼の手のひらを踏んづけるようにして欄間から入った。彼もあとから入った。そこには爆雷らしきものを始め沢山の兵器があった。こんな次第で軍人らしい敏捷さで頭にあった物を検べ終わると、会議室に戻り、リストを書き、一枚の受け取りを私に渡し、取りに来るまで動かすなという注意を与えてサッサとジープを走らせた。その受け取りを見ると“スクラップ8トン”と記してあ

た。私の印象を深くしたのは、処理の見事さ、行動の敏捷さであった。私は重砲兵連隊で訓練を受けたものだが、米軍の手際のよさは間違いに洗練されていると思った。

#### 4. 生研への転換と明昭会のこと

教育改革は憲法改廃と同じく占領軍の最大政策ではなかったろうか。昭和21年3月、ストッダード博士を団長とする教育視察団の来日によって民主、自由、平和の3原則が具体的に示され、6・3・3・4制の採用、教育基本法、学校教育法の制定が行われ、大学令、学位令は廃止された。昭和22年6月、東京大学に新大学制度実施準備委員会が設けられ、第二工学部からは井口学部長、瀬藤教授、関野助教授が加わった。東京帝国大学が東京大学と呼ぶようになり、身軽くなった感想を持った。この身軽くするという思考が本郷地区に集中するという意見として次第に優勢となり、第二工学部でも教授総会で真剣に討論した。第二工学部をどうするかについて二つの拠りどころがあったかと思う。南原総長と井口学部長とは一高時代寮生活を共にした仲で話しかかったこと、もう一つは瀬藤先生の持論である。日本の工業と工学とは別々に進み、工学は進んだが工業は欧米の輸入技術に頼り、両方の提携がなかった。殊に資源のない日本は原材料を外国から需めて製品化する技術を進めなければならないという信念があった。後に東芝や日本原子力工業の会社の枢要な位置についた時、貿易の自由化に注目せよ、警戒せよとたびたび警告を発しられた。つまり工業技術立国であり、経済面で貿易立国でなければならないという論理であったと思う。62講座から35部門に落ちたといえ、これには井口先生の奮闘があったし、工学の総合研究所に的を絞った見識は瀬藤先生の正論の実現だったと思う。

#### 明昭会

ここでは明昭会の存在について一言触れておきたい。明昭会とは誰が言い出したかはっきりしないが教授総会というオフィシャルな組織とは別に存在し、また俗にいう長老教授から離れて自由討議しようという教授助教授の集会であった。名称の通り、明治生まれで昭和卒業という中堅的教官の存在であった。私は殆んど出席しなかったので詳細なことは知らないが、よく出席し、リード的立場にあった山内恭彦先生の論理は同先生から直接聞いたこともあって記憶している。山内先生は物理、数学の神様のような存在で、先生は意外にも（実際は意外ではなかったのだが）技術尊重論者なのだ。後に著した“物理学の本質”という著書にもそのことが書いてあるが、大要次のような説理である。凡て示唆に富む。

1) 人類は幸福を求めようとして、超自然的な力に頼ろうとし、又は精神的な現実回避にのりられることを試み呪術や宗教によってこれを成し遂げようとした。しかしこの試み

は、たとえ時に成功することがあったにしろ、甚だ不確かな、頼りないものであった。そしてこのような感情的、空想的な方法よりも、現実的、理智的な方法により確実な結果を与えるものとしての科学を創り出すようになった。

2) 物理学は最も非人情的で理解に困難なものと思われているが、これは物理の理論が抽象的で、かつ数式の助けを借りて表現されていることが一つの原因と思われる。しかし一方物理学ほど簡単な、客観的な知識はないともいえるのであるから、この知識を一般に広めないのは専門家の怠慢とも考えられる。

3) 科学は常識からだんだんに抽象され、体系化されて発達したものであるから、常識と科学との間に截然たる区別があるわけではない。そして、これらの原始的な科学的常識は、その大部分を日常生活の必要から体得して来たものと考えられる。

4) 古代国家が、城郭、神殿、墳墓等の建設にテコとか、クサビとか、滑車も考察し有効に使った。ナイル河の氾濫による耕地整理には非常に進んだ測地の技術を持っていた。にもかかわらず体系化した学問に作り上げるところまでは到らなかった。これらを抽象化した学問体系にしたのは、ユークリッドやアルキメデスを生んだギリシャであった。

5) ギリシャは幾何学や静力学の分野で大きな功績を挙げたが、自然法則は人間の理知だけから先験的に導き得るという妄想に陥った。彼らは物体の“自然の運動”が等速度円運動であるのを“自明”と考えたため、遂に動力学(ダイナミクス)の正しい原理を把握することができなかった。この失敗は、当時の技術の発達程度によるものであろう。

6) ギリシャが学問に対して大きな貢献をしたことは、技術と純粋学問の分離である。少くとも原理的に、基本法則の没価値的探求と、人間の幸福のためのその応用との二つの使命が明瞭に区別されたことである。功利的目的をもたない純粋の真理の探求というとはなはだ理想的になる。この信念は今日の物理学者にも多分に受け継がれているように見受けられる。

7) 現今の危機(原・水爆の実験を指す)に対処するには、常識を体系化して科学としたように、良識(人類の個体、種族維持の本能に基いて発生した智慧)を整理し、純粋化した社会科学を高度に発展させて、自然科学に対抗させるのが最上の方法ではあるまいか。社会科学が国家とか、階級とか、民族とか、伝統とかにとらわれた習慣的な独善的な見方を捨てて、冷静に、無感情的に現実を直視し、それによって人類の理想的な社会の様相をはっきり見極めることができれば、物理学者はもっと安心して、本来の任務に没頭することができよう。

7) は山内先生の結びの言葉となっている。



明昭会で高木昇先生も高説を陳べた。先生は研究所に

なっても人材の養成輩出のことは研究以上に大事なことで、わたしは“生産技術大学院”と呼ぶことにしたい。と仰有っていた。昨年だったか、私は近年遺伝子の玄妙性の研究に未来を感じて、ぜひ取り上げて欲しいと申し上げたら、先生は分かった。わたしは量子の段階でやっているという返事だった。先生は電子工学の専門で東京工科大学を創設し学長をされている。

## 5. ケリー博士の思い出

昭和22年2月、GHQ 経済科学局のケリー博士は第二工学部を視察に見えた。これはやがて生研と理工研とは内容が類似しているから、一緒になって駒場に移れというのである。GHQの勸奨とあれば重い。当時、世界に知られた仁科芳雄博士のサイクロトロンは、没収され破壊された。信書などはすべて開封され検閲された。公務に服する者は詳細な履歴書を書かされた。そういう占領行政の中にあつてケリー博士に抵抗するのは容易ではないと思った。然し、昭和24年7月、最終の交渉でケリー博士は折れてくれた。それは単なる同情でなく論理によつたと思うが、瀬藤、兼重両先生の熱意と通訳に当たった吉田建一氏(吉田茂首相令息)のお陰もあったと思う。瀬藤先生の強調された点は、両研究所は出発点において共通するが、理工研は基礎研究に主点を置くが、生研は応用と生産現場の技術的解決が主点であり、裾は若干重なる二つの山形のカーブを描いて説明した。そして兼重先生の紳士的人柄と誠実な発言はケリー博士に通じたと思う。ケリー博士が納得された時、瀬藤先生は感動してお礼の言葉を陳べた。それを通訳した吉田建一氏が「激励を頂いたことを感謝する」と言ったところを抜いてしまったらしく、瀬藤先生が催促した。吉田氏が一寸戸惑っていると、先生は再度「エンカレジメント、エンカレジメント」と繰り返し要求したことを覚えている。ケリー博士は、瀬藤先生の要望にそい、教授総会で一場のスピーチをした。そのスピーチで何回か放射性同位元素をイソトープと発音したのを覚えている。又これは詰らぬことだが、吉田建一氏が「トイレットはどこですか」と問われ、この英語は私の初耳だった。戦中軍部が英語を禁止してしまつて却つて敗れたのではなからうか。

ケリー博士は兼重先生とウマがあつたように思う。博士の帰国に際して何か記念品をとということで、天皇の著書を贈ることにした。日本流に奉書紙で包み、水引で結び記念品、生産技術研究所と墨で書いた。そしたら天皇のサインが欲しいと言われた。安藤先生に訊いたらそれはむずかしいと言われた。本の名は「相模湾産後鰓類図譜」といったかと思うが立派な装丁本であつた。

## 6. 砂漠の中のルネッサンス

昭和24年5月、生研の設立は官報に明示されたが、多く

の職員気分転換は出来ていなかった。私自身民主主義の理解に悩んだ。生研は2ヶ年を目途に定員の整合化を求められていた。学部と研究所とは、2年併存し、学部は更に2年、分校として付置した。

終戦によって次々と復員兵が帰還し、職場に戻った。本館の出勤簿台の上の壁面に「檄」と書かれた名文が張り出され、長く注目された。復員兵である青木春男氏と増田末太郎氏の署名入りである。文は虚脱状態になった同僚への奮起を促すものである。そのような空洞化の雰囲気は一般にあった。しかし一方に、民主主義に立脚した活動も起こった。学生の自治会活動、職員組合の成立などはそれである。原田正道先生が委員長となり、越年手当要求を掲げての運動は本郷キャンパスに及び頂点に達した。

第二工学部学生自治会は、戦中戦後を通じて教官と対立することはなく、学部長と押し問答することもなかった。瀬藤先生はいつでも話に乗る。何時間でも話を聞くという無手勝流である。戦後、少尉、中尉の若い士官が多数、編入学で入って来た時の学生大会は随分活発な議論が行われたが、それは日本の将来に論点を絞った討論で、イデオロギーに余り深入りすることではなかった。傍観者としての私の感想は、工学部の学生は学問の性質からか、現実感に富み、全学から見れば、ニュートラルな位置にあったと思う。

戦後の一特色は、一言でいえば、弥生町ルネッサンスといたい文化活動である。第一に立派な各派各界の有識者を求める講演会の開催、第二はサークル活動である。学生自演の演劇、洋楽、邦楽の名手による演奏、文芸、謡曲の会があり、異色は顕親会という本願寺派の宗教サークルもあった。謡曲は四流におよび、竹中二郎先生、山内恭彦先生、今岡稔先生が首導し、多数学生が参加した。後に山内先生の斡旋で懐徳館で全学の教官が参加するまでに至った。

ルネッサンス的運動は、過渡期の空洞を埋め、砂漠のようなキャンパスを色どった1ページだった。

教職員合体の弥生会にあって、もっぱらリーダーシップをとって活躍した、小川国雄先生が、ある時“ここにも全く希望がありません”と心もちを述べられた。私は返す言葉がなかった。そしてまもなく先生は、生研を去った。空洞状態の批判かもしれない、象徴の事態として深く心に残っている。

## 7. 麻布移轉回顧

千葉か東京かという問題は、片付いたようで残された問題であった。3代所長星合先生はこれに終止符を打とうとして、自らバランス・シートと名付けた長短得失を書いた一表を仕上げ、或日の常務委員会に提示した。その詳細は庶務の記録に残っているかもしれないが、私なりに抽象すると、理想と現実の問題と思う。千葉の広さと未来性、そ

れに対して東京の便利さと、研究生の得易さにあった。この時の結論は千葉がいいということでこの問題は納まったかに見えたが、4代谷所長の時、麻布ハーディーバラックが返還されるという情報に浮き足立った。当時、麻布の外に目黒の元海軍工廠の跡が上がった。両方検分した先生もいたが、目黒の方はやがて影が薄くなった。それは明治大学が希望していること、そのバックに大野伴睦という有力政治家が存在することで、麻布案が優勢になった。谷先生は教授総会に諮って移転を決めたようだ。日が経つと全部生研とはいなくなった。共用する物性研は元理工研の人々であり、茅総長はそれを認め、両研究所は、ケリー博士事件以来、連絡会議をつくり、よしみを深くして来た間柄でもあった。

谷所長時代によって大体決まり、5代所長福田武雄先生になって、さらに具体的折衝をするようになった。福田先生は麻布は狭いからその補いとして千葉を5万坪取るという目算で所員の了解をとったが、交渉が進むほどにそれもむずかしくなった。結局、元共通第3教室を核とする東南側用地になってしまった。それで麻布庁舎のめぐりに何棟かの実験棟を建てるなどして引越は行われたのである。

私は元近衛歩兵連隊の兵舎に移るということに第二工学部の因縁めいたものを感じた。因縁といえば、米軍の星条旗紙の施設もあるし、自衛隊の司令部も近くにある。建築学科の教官は中庭に橋を架けるようにして増築することを提案したこともあったが、それは実現しなかった。又通勤が遠くなった人も出た。

星合所長の頃、矢内原忠雄総長が千葉を視察し、この広さは大事だ。交通の便は我慢してもよい。必ずよくなる。という激励の言葉を残して行かれた。これは文科系の感覚と思う。

麻布移転は教授総会で決定した。これについて平尾収先生は、こういう問題は教授総会で決めるべきものと思う。と、事務部には望まない人もいた。だが、金森九郎先生は困る人達の立場に同情して一肌脱いでくださった。

跡に据わる新制千葉大学はその頃蝸の足だった。文部省はこれを解消したい一念があってキャンパスの大部分を求めたものと思う。

もう一つ思い出す。日本学術会議の専用庁舎を生研構内に置かせたのは、他ならぬ兼重先生である。それを困るといったら、それなら代替地をあなたがたで探みなさいと剝ねられた。

希望と約束は破られるためにある。近く駒場へ移るについて違約を起こさぬよう警戒されたい。

付記。鶴田酒造雄事務局長は東大用地は、樺太から南洋委任統治領までに100万坪あったと、今の1坪の効用度は反比例して高いのである。

## 8. 協議会と財団の設立

生研の設立趣旨は産業復興と言い換えてもよいと私は理解している。産学協同という見方もできる。その第一陣は“生産技術研究所協議会”であった。協議員の依頼は全教官が手分けして当たった。お願いの意を含めた丁寧な委嘱状を発送したのは昭和24年10月1日のことである。産業界、学識経験者併せて33名で、同年12月14日第1回の会合もたれた。会長に石川一郎氏が互選された。この会合で熔接棒に困っているという注文が出た。生研側からも必ず多数教官が出ているので会議の効用は大きかった。

石川一郎氏は、初代の経済団体連合会の会長で令息六郎氏は第二工学部卒業生だった。石川一郎氏を会長に選んだことは、歴代の会長にもよい影響を伝えたと思う。私はたびたび事務連絡で経団連を訪れたが、いつも心よく会ってくれ、気さくな方で頼みごとはよく聞いてくれた。よく誰々さんはどんな人かと逆に尋ねられ、それは誠実みを私に感じさせた。

丹羽周夫氏（三菱造船社長）も似たところがあった。ボクが（技術屋出身）社長になることは珍しいのだ。とか、「わたしたちは井口在屋先生（井口常雄先生の父君）の講義を聴いた仲間なのだが、そういう部類はもう少なくなって、今ではそれが自慢ばなしになってるヨ」などと聞かされた。

次の中原延平氏（東亜燃料工業社長）は、初対面でいきなり「マア、金の方を心配すればいいんだらう」とザックバランに笑顔でいう方だった。

その生研協議会は、二代兼重所長の時、財団法人にした旨提案し、承諾された。寄付行為に謳った基本財産は500万円と小さかったが、賛助会費を集め、受託研究を活発化することなどの事業を掲げ、文部省に申請し、昭和28年12月許可をとった。瀬藤先生、鈴木弘先生からは早期に貴重な寄付を頂き、且つ運営につとめ、基本財産を大きくした。私が事務を行った時代は監事が内田祥三先生と大野碩十郎さん（味の素KK）で、内田先生を訪問する機会は多かった。几帳面な兼重先生の指図で公認会計士と契約し、毎年決算期にお世話になった。

内田祥三先生は、東大総長の時は、近寄りやすい方と思ったが、個人でお訪ねするといろいろと心に残る話をされた。法隆寺金堂の火事（昭24・1・26）で吃驚したといたら“木造はいつか焼けるもの、たまたまそれが昭和に起こっただけのこと”と平然たるお答えだった。大講堂建築のことを伺ったら、ボクの主張は不燃建築ですといい、ご自分の家も不燃にされた。先生の時代の設計は、言葉にすれば“質実剛健”というべきものであり、生研の星野君（先生の弟子、星野昌一先生）たちのやっているのは“明朗軽快”とでもいうべきでしょうと。又、その頃コンクリートむき出しの設計をしたフランスのコルビジエのこと

も感想を述べられた。

今日、この“思い出”を書く羽目になって内田先生の数々の聲咳から思い出すことは多い。残念なのは、丹波重光先生に会っておきなさいと言われ、心に銘じつつ果たさなかったことである。

## 9. PR 活動の思い出

生研が“生産研究”というPR機関誌を発行することになったのは、瀬藤先生の強い意志である。編集委員会を作って最初の委員長に星合先生が指名された。瀬藤先生は先生方を鞭撻する意味もあると仰有ったが、星合先生は最初の委員会で生研の屋根に温泉マークを掲げるつもりで始めたいと仰有った。戦後PRという言葉が使われるようになり、PR第一号として国立研究所が打ち砕けた学術誌を出したことは破天荒だった。PRとは本来の意味は外向きな意思伝達活動と理解するが、象牙の塔と全く対蹠的な能動行為とと思っている。一方不定期に発行する“生産技術研究所報告”は純粋な学術発表誌であって同時に始まったが、昭和25年第一号を出したと記憶する。こちらは部の機関を経て常務委員会で決定する手続きを取った。余談になるが、生研報告の表紙のデザインは恒久的に用い、看板になるので福田武雄先生にデザインを頼み、生研のマークは所内から一般募集し、試作工場の白石さんの図案が当選した。

これも思い出の一つだが、生産研究は早くも陛下のお目にとまり、学術誌の代表として御製を賜った。丁度瀬藤先生退官の直前で、先生は非常に喜ばれ、よい贈りものにもなり、昭和26年4月号の“アルミニウム特集号”にこれを載せることができた。なお一般誌は総合誌の“改造”だったと記憶する。

PR活動の第二弾は“研究所公開”でこれも社会の先鞭をつけたと思う。由来星合先生は、学部時代とちがって研究所は“ケジメ”がなくなりがちになるからという考えであって、公開日を設立日の5月31日とした。研究資料の展示のほかに、講演会、映画会も企画し、千葉の広いキャンパスは第一回を開いた時は4,000人の来客を数えた。奨励会の評議員会を併せて行い、その企業の技術関係のスタッフが多数参観に見えて、教官一同も応接の邊を惜しみ且つ愉しむといった風景だった。PR第三弾は“公開講座”である。当然ながらテーマを定めて実行する。期間も五日ぐらい使った。奨励会もサービス面を助けた。アンケートを取ったこともあった。評判は手前味噌になるが大層よかった。然し、希望や注意されたこともあって改善した。

PR活動については教官方も希望を出された“東大生研案内”とか“生研リーフレット”はかくして生まれた。

話は、所外にそれるが、“国立大学付置研究所長会議”では当初から生研の大機能が頼られた。年一回は上野の学士会館で開き、平常は東京が常置委員会を把握し論議を重

ねた。常置委員長はいつも生研所長が互選された。或時、これを京都に譲ろうということになり、先ず事務長レベルで討議しOKとなったが、所長レベルで京都方からことわられた。

昭和32年、茅誠司先生が東大総長になった。東大以外の出身者が総長になったのは多分嚙矢と思う。茅先生の名刺は“東京大学学長”とある。さる新聞記者が質問したら先生は“総長”はニックネームだよと答えた。時代はドンドン変わるのである。そんなことを頭に描きつつ私は生研を去ったのである。

## 10. 瀬藤先生を懐しむ

第二工学部がなかったら生研はない。瀬藤先生がいなかったら第二工学部はない。そういっても過言でない程、瀬藤先生は第二工学部を切り廻した。私は先生を“剛毅な人”と表現する。兼重先生は“腹の太い人”と言い切った。瀬藤先生退官送別会での言葉である。電気の沢井善三郎先生は、会議、座談のやり方を評して“先生は沢山の抽出しを持っている。いろいろな意見はみんなその抽出しにほうり込む。そこには自分の考えも整理されて入っている。すべての質問と答弁は抽出しという工場の中でシャッフルされて明快な答えとなる。と、これはよく観察した評言と思う。

先生は耐久中学を優秀な成績で卒業した。飛び級である。校長先生は“論語”の一冊を賞として贈った。扉には校長の褒詞が書かれている。先生は、その論語を生涯座右に置いた。勿論、学部長の机の抽出しにも潜ませた。

私の呈する剛毅という語は、実は論語にあるのだ、論語子路篇に

子曰、剛毅、木石之間也。

と。人の気質には剛といっても意志が堅固で私欲に屈しないものがあり、毅とは忍耐力が強く、操守の堅固なものがあり、木といって容貌が質朴で飾りの無いものがあり、訥といって口をきくことが下手なものがある。この四つは、皆、質が美しくて仁に近いものである。訥だけは合わないが、ともかく孔子の説く真髓である“仁”に近しとは、芽出たい人物である。次に、私が評価したいのは、あの戦時中、日本精神とか大和魂とかいった抽象語を一度も吐かなかったことだ。戦局の非をいう時は、物量の差、輸送力の差とよく言った。

昭和26年2月の頃だったか、先生のお嬢さんの慶事に事務部有志からお祝品を贈ることになり、私がお祝品の使者に立った。その日、陛下から御製下賜という情報があった。北沢のお邸へ伺い、使者の役目を果たし、この情報を申し上げると、即座に“ソレハグッド・ニュース”と仰有った。慶事が重なったよろこびである。ところが生産研究編集委員会で星合委員長がこれを披露すると、反対論が出た。学

術雑誌にふさわしくないというのだ。これが瀬藤所長の耳に入るとボクが一文を書こうという。理由の一つは“天皇への礼を欠く。近頃、父に対する敬愛ほどにも天皇を尊敬しないのは嘆かわしい”というのだ。御製は生産研究のアルミニウム特集号に載せた。皇居へは4冊だったか、当該誌を献上した。瀬藤所長と星合委員長の二人は日ならずして天皇家へお礼言上上がったところ、宮内庁は、拝謁言上は瀬藤所長一人に絞った。帰って来て瀬藤先生は怒りの一言を吐く。天皇へではなく、宮内庁の杓子定規のやり方である。星合先生は何も仰有らなかった。

瀬藤先生は電子顕微鏡の創始者として、昭和天皇にご説明申し上げた。説明が一通り済むと陛下は「トキニレンズハドンナモノヲ使ッテイルノカネ」と質問されたそうで、瀬藤先生は「がっかりしたね、陛下はなにを聞いていたのか。さまざまな学者の進講を聞いてるので、知識は広いが専門学校程度なのだろう」と。

新工学部を作る亀山直人委員長の第一特別委員会と、新研究所を作る瀬藤象二委員長の第二特別委員会が、合同で討議する委員会があった。この委員会の或日、瀬藤・亀山両氏の激しい口論があった。瀬藤先生はかねて亀山先生に提出して置いた新工学部瀬藤試案が一向に俎上に載せないことを抗議した。売言葉に買言葉で、亀山先生は顔に皺を寄せて怒った。言葉が荒しくなって剣呑な空気になった。誰も呆然としている。見るに見かねて谷安正先生がトメに入った。別に仲介案があってトメるわけではない。マアアといって割って入ったのだ。暑い時季で、瀬藤先生の開襟シャツを横に見つつ祈った。書記役の私は手を出すべきか、記録にとどめるべきか。私は数多くの書記をやり、相当正直に記録する方である。亀山先生が、二つの講座を仲よく寝かせる時、ダブル・ベッドといったからその通り記録したら、亀山先生は、その通りといって苦笑したことももある。瀬藤先生は味方にすれば頼もしい人。敵にすれば怖い人でもある。この瀬藤議案は新工学部85講座を返ったものだったと記憶する。

今は亡き瀬藤先生に対して私も強い印象を残した。或晩のことを記したい。あれは昭和20年3月17日の夜更けであった。私は中央本館の学生主事室でひとり事務をとっていた。その時刻、ラジオは硫黄島の日本守備隊のニュースを流していた。玉砕という響きは強い。日本の終末近しと思った。廊下を出て、右を見て学部長室をノックした。瀬藤先生は井口先生へ学部長を引き継いで貰うための仕事をしていただ。先生に硫黄島玉砕のニュースを伝えると、大分間を置いて“力の差だね”と呟くように言った。そこで私が詰め寄るように言ったことは「ワタシタチハドウスベキカ、コノママデハイラレナイ」と。瀬藤先生はおもむろに指を出して「イマワレワレノソンザイハコノ一本ノ指ノ先ホドニモ足ラナイトコロニイル」そういって現在の仕

事をやることしかない、という説得の言葉だった。

戦艦大和のいたずらな轟沈(4月)、沖縄守備戦の潰滅(6月)、何回もダメ、ダメが続いて原爆の惨など情報稀薄の重たい暗い日々が続いた。

瀬藤先生の人気は、学生主事グループに強かった。小宮さん然り、西尾さん、高島さん然り、夜、先生の在室を狙って会話を求めた。話しには何時間でもつき合って下さる。先生は健脚家でもあった。東京空襲のあと、若い青木君を連れて総武線を歩いた。一高時代、東京から房総の南端白浜まで徒歩旅行をやったそうである。

総長代理を一ヶ月つとめたことがある。ある日自治会の学生が大勢押しかけて来た。加藤学生主事が“追い返しませうか”といったら“それはいかん、話せばわかるよ”といわれ、加藤さんはえらい人だとほめた。

先生の遊ぶ姿は珍しい。現職の常務委員らと退官のOBの先生らとが年一度一泊旅行する企てが続いた。熱海行だったか、とあるパチンコ店へ入って先生は不器用な手つきでハンドルを撥ねてたのしんでいた。また、電気工学科卒業生から贈られたオルゴールをかけて愉しんでいる風景も見た。

先生は“其水”という雅号をもっていた。セトーをフランス語でもじるとソノミズとなるのだそうだ。先生は論語に通じていても儒者くさいことは口にしなかった。

先生の文化勲章は兼重先生の推せんによるものと思う。決して人に頭を下げない先生。下げないで済むから大学に残ったといわれた。学位もとらなかった。今更自分の弟子に審査でもあるまい。そういつて先生はいささかも憚らない。本当に天晴な先生であった。

そうだ、もう一つ思い出した。昭和24年2月の大吹雪は校内に一米以上の雪を積もらせた。朝、スキーを出して本館に行った。瀬藤先生だけいた。“誰かいないかね、探してくれ給え”と。ようやく森大吉郎先生を見つけた。森先生を見るなり、除雪を考えてくれという。森さんはそれは、とても出来ないと思って、私にどうしたものかと言う。私も同感だ。瀬藤先生は火事が出たら消防車は動けないからだという理由だった。金輪際火事を出したくないという瀬藤先生の気持は分かる。森先生は自動車の前に何かラッセルするものを付ける方法しかないという。それにしても人手はない。即刻出来ない。それより雪よ。早く解けてくれと思った。

第二工学部をつくった平賀譲、瀬藤象二、内田祥三、井口常雄、丹羽重光、亀山直人、菱川万三郎、竹中二郎、吉川晴十、屋合正治、兼重寛九郎、各氏の生年をしらべると、1878年から1899年の間に集中している。彼等は生粋の明治人である。強い意志を持った人々が協力すれば、偉大な事業は何でもやれたろう。しかし、不可知の運命をどこまで想像したであろうか。瀬藤先生は最終を処理されたのであ

る。

## 11. 走馬燈のごとく学生の生活を顧みて

私は若い時、北海道のさる女学校に赴任した。推せんしてくれた文部省の理事官は、北海道も2年いれば都になる。生徒を指すときは万遍なくやりなさい。生徒は気をまわすからと教えられた。第二工学部へ来てても住めば都論と公平感を持っていた。学生は初めは銀杏並木を憧れたと思うが、3年いれば千葉も都となる。くやむ人は少なかったと思う。

私は学生課の職員として務めたが、その仕事は想像を覆えすものだった。仕事の殆んどは食と住との世話だった。書記官は“食探しを頼む”であった。朝出勤する時、ズックの鞆(中に自分の全財産数千円を入れ)を肩に掛け、きょうはどちらへ行こうかと正門前で方向を定めてから歩き出した。

学生寮は二つあったが一つは焼け、東奔西走し、さらに四つ作った。中で戦後獲得した小仲台の兵舎は補修する金も出ず、学生らが奮起して奉加帳を有力者に廻して資金を調達してくれた。

学生の立場に立って問題を順に挙げれば、1に空腹、2に戦局、3に病気、4にアルバイトであろう。学生には入学時に出して貰う学生カードがあって連絡先などに加えて趣味を記入して貰った。大部分の学生の趣味が音楽であった。その好きな音楽には殆ど手が廻らなかった。栄養失調も原因で休学者が一時100名を超えた。病気は肺結核である。ストマイとかパスといった特効薬が出ず、この一事だけでも深刻な悲痛事だ。後に毎日新聞にアメリカの重症結核患者がヒドラジットで治ったという記事を読んだ時の驚きは生涯忘れない。

育英資金、奨学金も思い出がある。仕事は幹旋と交付だが、空襲が来ると、机上のお金はほうり出して同時通訳室へ飛んでいく。ある日、学生課へ金を受け取りにいくと書記の某君が空爆死していた。鮎川義介氏の桜陵会、井上侯爵の井上有英会などの熱い応援に感謝した。他に陸海軍の委託学生になる道も栄えた。

アルバイトで成功したのは通信添削会をつくったことだ。これは大当たりして、やがて学部長会議で取り上げ、全学的な、“財団法人東大学生文化指導会”となり、戦後25年間続いた。

千葉市長は永井準一郎という方で、大学誘致の先達であり、長く配給米を増援してくれた。月30俵という配給は、学生食堂や寮に対して有りがたい補給であった。広い学内ゆえ農耕が教職員のノルマになった。栽培はさつま芋、ほかに落花生をやった。収穫を待たずよく盗られた。芋は米より主食になった。青木昆陽の碑が幕張にある。8月15日、今も私はさつま芋食にしている。

戦後、蔵相石橋湛山は預貯金を封鎖した。いつ彼が銀行

の門をくぐるか国民は注目した。学生にだけ特別引き出しの証明書を発行した。教官方は我慢するしかなかった。

千葉市に占領軍のCIE支部ができた。学生は英会話を希望した。CIEのキャップは出張教授を応諾してくれた。誰も発音がダメだった。ユニヴァシティが出来ない。長く英語は閉ざされていたから苦勞した。教官方も外国人を招んで会話を学ぶようになった。

学内開放で劇や話の泉などをやった。先生方も見たり出たりした。ホッとした気分になるのである。

学生自治会と職員が一緒になって弥生会を結成した。弥生会は次々と名士を招んで講演を聴いた。岡治道博士はBCGの話をして学生諸君にエレガントなエックス線装置をコンパクトなものにしてくれと結んだ。BCGはアメリカの医官が驚いた程唯一日本の勝った研究と聞いた。神山某という共産党員も来た。彼は口ぎたなく天皇制を罵った。菊池寛も来てくれた。令息が土木学生の英樹君である。寛は、皆さんが大へんよくわたしの話を聞いてくれたと感動していた。私の質問に“中味は変わっても文学の伝統は受けつがれる”という趣旨を答えた。文学報国会を率いた英雄は一年後亡くなった。

弥生会で活動した小川国雄さんが、瀬藤先生からなにやら論されていることがあった。叔父さんのようにという励ましの言葉が聞かれた。叔父さんとは湯川秀樹先生である。

第二工学部九年の歳月を経て2,600名の英才が巣立った。そして戦後の社会に与えたインパクトは大きい。その中で私のはかりかねた死がある。彼は建築科の学生川口重美君である。昭和24年3月卒業してわずか2週間で服毒自殺した。彼は芸術至上主義で俳句に天稟の才能をもった。死後、数人で彼の遺句集を編んでやったが、言う人ぞ云う。芝不器男に匹敵する作品であると。

## 12. 原罪論

原罪の語は神学にあるが、ここでは社会科学として考えたい。第二工学部は戦争の渦中に生まれた。創設者以下生研を含めて負うた罪は剝離できない。罪は罰を伴うが世界の現状が多かれ少なかれそうなのだ。逆にいうと罪ある故に人類は進化する。昭和15年、日本は仏印へも進駐した。その前年にはノモンハン戦で負けている。これはアメリカの世論を大へん悪くした。宣戦布告直前にアメリカのハル國務長官はハル・ノートという最後通牒を日本に突きつけた。そこで大東亜戦は始まった。第二工学部が開学した翌月、ミッドウェー海戦を展開した。結果は優勢たるべき山本艦隊が、劣勢たるニミッツ艦隊に敗れた。仔細に分析すればこれで日本の敗戦は決まったのだ。敗因は諜報機能のちがいである。言い直せばエレクトロニクスで敗れたのだ。広い南西太平洋で次々と陸戦と海戦をし、日本は玉砕した。山本五十六、古賀峰一の両連合艦隊司令長官も戦死した。

そして、止めは昭和19年6月のマリアナ沖海戦である。これで石油も取れなくなり、制海権、制空権は日本から去った。最後の巨大戦艦“大和”は無理に出陣して九州沖で轟沈した。乗員3,000名をむごむご水漬く屍とした。伊藤整一司令長官は度々足を運んでムダを訴えたが及川軍指令部総長は命令をかえなかった。末期の戦争は精神論で戦うのでなく合理的科学論であるべきだろうに。太平洋戦争は、特殊潜航艇で始まり、特攻機で終わった。共に一人乗りである。

日本の大本営はウソとはいわないがカクス。牽強付会である。戦中、2度の大地震があり、2発の原爆を受けた。それらは巧みにボカされた。天気予報も禁令であった。こういう世の中で第二工学部は僅かの抵抗はしたが、筋としては順応せざるを得なかった。第二工学部閉学最後の行事は谷一郎先生と私に命じられた。物故した教職員41名の氏名を講堂正面に列挙して厳粛な慰霊を行った。“蛍の光”を斉唱しつつ、正門に達し、瀬藤先生が表札をおろした。先生は自ら始めと終わりを実行した運命の人、原罪の人であった。

終戦から生研に転換する過渡時代、傍観した人々の浅間しさから悪態をいわれ、刃向かえば譏られ、面従腹背の人も見た。しかし、それを見返す事実は、卒業生諸子の働きにあったと思う。私は偶々、今岡和彦著“東京大学第二工学部”を読んでそれを確かに裏付けされたと思った。

## 13. アウト・サイダーとして

学部時代と生研時代とは使命は変わった。学部時代は頭を使う仕事はなくてもっばら生きるための労働だった。しかし戦争遂行のさ中に理想はなかった。生研になって学生がいなければ補導も厚生もない。しかし偶然にも学部転換から生研設立への過渡期に臨時業務部主任を命じられてすべての委員会に出席した縁で生研に留まることを決意した。私はどちらかという人に付く主義は採らない。生研の設立趣旨に感じて残ったのである。それには二つの使命がある。科学的総合研究と研究成果の実用化試験である。それは国の復興のかなめである。工学者のすることとしてまことに相応しい。私はイヤな時でもこの目的のために我慢する。私の工学行政への意見もここに基いている。フラフラしてる仲間に忠告もした。「君、人に仕えてるんじゃないよ。職場には使命がある。そこに惚れ込み給え」といった。だが大学も事務を入れた三位一体の機構なのだ。昭和43年の学内紛争の時、加藤一郎総長は総長選挙の課題も含めて事務系にも論議を命じた。その時、私は既に学内で提案されていた“目的社会(ゲゼル・シャフト)”の理に従って事務系も選挙権をもつことがよいと主張した。理由は行政補佐の活性化になると思ったからである。これが在職最後の忠告となってしまった。

### 13. 教授総会と私

教授総会には学生のことが出るのでしばしば出席した。ここでの発言の特色は、合理的で無駄がなく、迎合がなく、独立している。瀬藤先生もこう言った。“教授総会は小さな社会である。悲観論、反対論、原則型、牽制型、さまざまあっていいのだ。”と。しかし、重要と思った意見は、会后、紙箋に書き残した。

教授総会をどう見ているかについて、池田健先生はおもしろいことをいわれた。「仮りに徳田球一のような人が来て、独得な弁舌でアジっても決してわたしは動じない。」付和雷同しないとは、勇気であり、理知であろう。また、多数決できめることも正常であろう。ただし、決定者のレベルが低ければ正当にならないかもしれない。大学のレベルにはそれがない。

池田先生は、いくつかの示唆を教えてくださいました。方だつた。

1 足す 1 は、ほぼ 2 である。

数学の答案を見るとき、答だけで採点しない。答はちがっていても、プロセスで採点する。

軍は、シュラウド（翼のつけ根）の設計をたのんでくるが、全体の構造を知らせない。知らせないのは、彼らの功名心だろう。それでは戦争に負ける。

この見解は、司馬遼太郎の日本の戦車では米ソの戦車とたたかっても全く勝てないと分析した説と同じである。

私は陸軍で要塞砲を習った。要塞砲は日露戦で旅順攻略に使ったものだった。昭和の陸軍は精神主義だった。



4 先生のよく使われた英・独語を記します。

瀬藤先生 betonen

兼重先生 ex officio

星合先生 at random

井口先生 ein zwei drei (乾杯の時)

それぞれが性格にピッタリと思いませんか!!